Ⅲ－２－６　島の歴史

西表島はマラリアや明和の大津波後の土地の疲弊のため定住することが厳しく、古くからの集落は数える程に少ない。琉球王朝時代には何度か強制移住が行なわれたが、定着することは困難であった。それでも古見や祖納などでは、自然と共生しながら生活を育み、祭りや芸能、信仰などの独自の文化を継承してきた。

一方、明治期に開始した炭坑開発は、新坑の開発と衰退を繰り返しながら大正から昭和の時代を移り変わり、一時はかなり発展したが、第二次世界大戦中に次第に衰退していった。

第二次世界大戦末期に、波照間島の住民が強制的に西表島への疎開を命じられ、この地で多くの住民がマラリアに罹患し波照間島に帰島することなく亡くなった方もいた。

このように過酷な経緯をたどった西表島の歴史を、島で暮らしてきた先輩方から教えてもらうことで、島の歴史を理解し、島を愛する気持ちを育てる機会とする。

①西表の炭鉱の歴史

西表島には古くから燃える石に関する言い伝えがあり、18 世紀の文書には地域の産物として「燃石」の記述がある。

宇多良炭坑は、1933（昭和 8）年に開抗し、最盛期には抗夫千数百人が就労していた。周囲を密林に囲まれた炭坑村が存在していた。現在、石炭を運ぶトロッコのレール敷設のためのレンガ積み橋脚の残骸の一部などが残っている。2007 年には経済産業省の近代化産業遺産群に認定された。宇多良炭坑跡歩道を歩きながら、炭坑での強制労働や自然との対峙など島の過酷な歴史を学ぶ。なお、西表島の炭坑の歴史は、昭和 35 年を持って終了した。

Ⅲ－２－６－１　西表の炭坑の歴史〔対象：中学校〕

プログラム	西表島にも炭坑があった！　その歴史を学ぶ
ねらい	西表の宇多良炭坑跡地から、戦争に係わる強制労働や自然との対峙など島の過酷な歴史を学ぶ

〔学習の背景〕

- 西表島には古くから燃える石に関する言い伝えがあり、18 世紀の文書には地域の産物として「燃石」の記述がある。
- 西表炭坑の一つである宇多良炭坑は、1933（昭和 8）年に開抗し、最盛期には抗夫千数百人が就労していた。
- 2007 年に経済産業省の近代化産業遺産群に認定された。
- 石炭を運ぶトロッコのレール敷設のためのレンガ積み橋脚の一部などが残る。（ガジュマルが絡んでいる）

活動	具体的な学習内容
炭坑跡に続く歩道	歩道沿いの植生や生き物を観察する。
炭坑遺構の観察	当時の写真とともに採炭トロッコ用の支柱など遺物の説明を受け、炭坑労働の様子を想像する。
炭坑の歴史	琉球王国時代から明治期の炭坑開発、大正期の全盛時代、戦時体制での採掘など西表の炭坑史を振り返る。※事前学習

宇多良炭坑橋脚跡

宇多良炭坑を説明する解説板

萬骨碑

萬骨碑　　修学旅行生

授業形態	専門講師による野外授業
実施場所	宇多良炭坑跡歩道（木道 65m　歩道 918m　案内板 6 箇所）
観察方法	木道～歩道を歩きながら、炭坑の悲惨な歴史や自然と対峙して来た島の暮らしを説明
使用する機器	木道マップ（植生マップ）
実施時期	特に制限なし
所要時間	２時間　※移動含まず
対象学年	中学校
支援機関	林野庁沖縄森林管理署、西表森林生態系保全センター

石炭

エゴノキ（エゴノキ科）

コンロンカ（アカネ科）

ツルアダン（タコノキ科）

オキナワキョウチクトウ（キョウチクトウ科）

オオハマボウ（アオイ科）

アダン（タコノキ科）

サガリバナ（サガリバナ科）

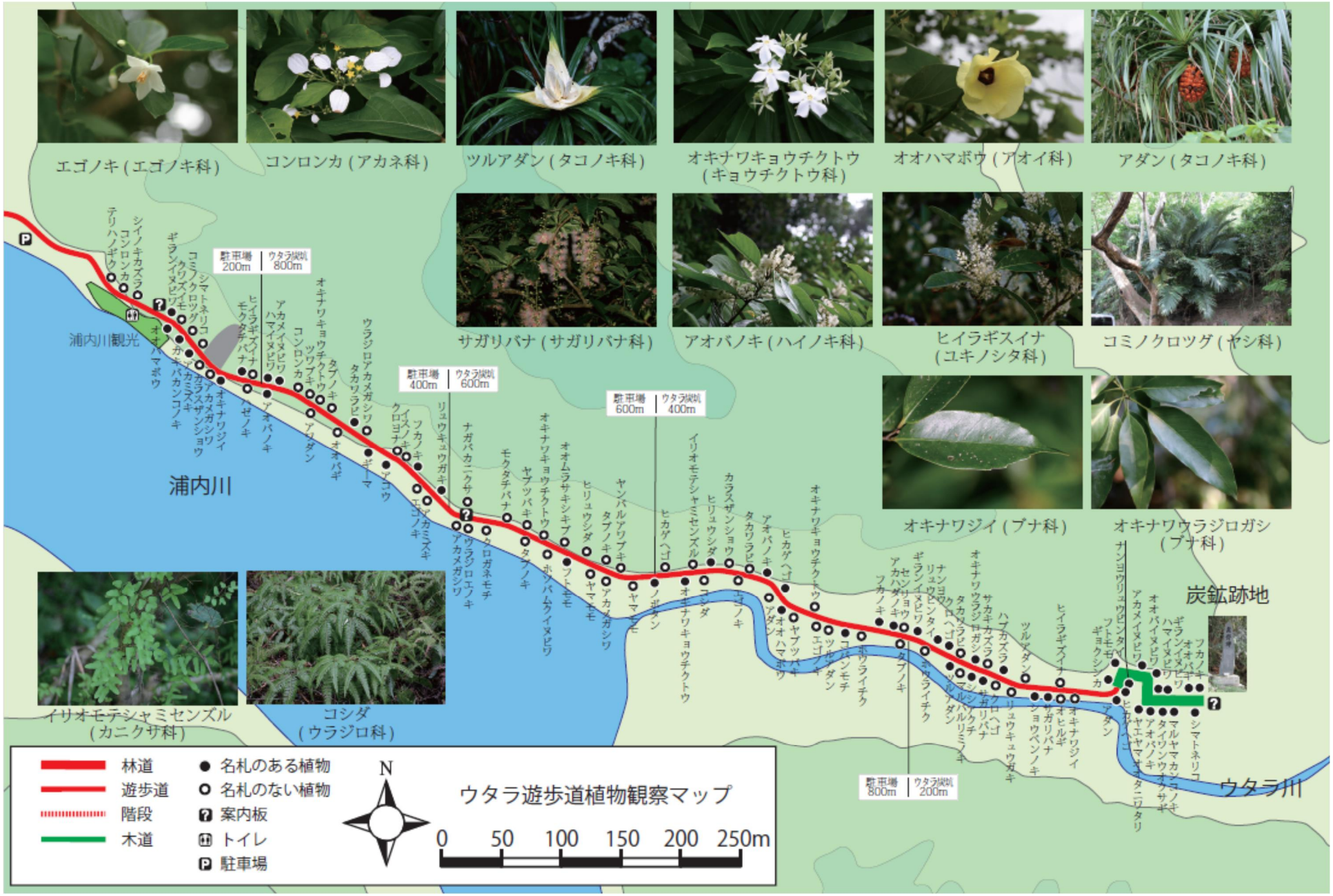
アオバノキ（ハイノキ科）

ヒイラギスイナ（ユキノシタ科）

コミノクロツグ（ヤシ科）

オキナワジイ（ブナ科）

オキナワウラジロガシ（ブナ科）

イリオモテシャミセンズル（カニクサ科）

コシダ（ウラジロ科）